

地球の木講座 2023 (9/30 横浜 YWCA)

「森とともに暮らす意味」 内山 節氏 講演録

内山です。僕は東京の世田谷区の生まれですが、50 年くらい前に偶然群馬県の上野村（日航機が落ちた所）に行きまして、気に入りました、以来半世紀、東京と上野村の両方に住み続けています。森については実は本職ではありません。

<上野村では>

上野村は 95%が森で、田んぼがない。村としては昔から「森とともに生きていく村を作りたい」という希望があった。村の森は 70%が天然林です。森が元気に育つのを望むなら、天然林でも、ある程度間伐した方がいいんですね。上野村は山が急峻です。切った木をそこに置いておくと台風が来た時など、それが重しになって山崩れの原因になるので運び出します。しかし倒れた木が腐っていくのは山の肥料にもなるので、切り過ぎはうまくありません。切った木は村の森林組合で製材しますが、約 60%は材として利用できない。いい木を切っているわけではありませんから。ですからそれを木質性のペレットにする。村ではペレットストーブの普及を進めています。

僕のうちでも冬はペレットストーブですが、大変便利です。灯油のようにザザーッと入れればいいだけ。薪ストーブに比べて燃焼効率がよく、出る灰は薪ストーブの 10 分の 1 くらい。安全性が高く温度の設定なども簡単なので、できたら高齢者に使って欲しいのですが、年金生活者には厳しい。ペレットストーブは全部合わせると 100 万円くらいかかりますから。それで村が補助金を付けています。そんなことをしながら、村の中でペレットを作りそれを使っています。

屋根には太陽光パネルを乗せていますが、太陽光パネルは環境にいいのか悪いのかよく分かりません。太陽光パネル自体が曲者です。作る過程と、また寿命が来て廃棄する時にもいろいろ問題が出ている。環境問題については、この面ではいいが逆にこの面ではまずい、というように、これがいいという手はなかなかない。うちの村では、そういうことからメガソーラー的なものを作る気はなく屋根の上でささやかな発電をし、また先ほど話したペレットの 60%を使って発電をしています。あとは小水力発電。川の水をうまく使って水車発電のようなものをやりたいのですが、川の権利は国交省のものなのでなかなか許可が下りません。

そんな感じで、うちの地域に適したものをいろいろ組み合わせながら地域で循環させていく。そういう仕組みを作っていきたいと思っています。

<いろいろな森>

今までいろいろな森を見てきましたが、（この辺は判断が難しくなるんですが）自然だけが作った森というのは少ないのです。自然が作っていないながらそこに人間が加わって、自然と人間の共同作業で作ってきた森が実は多い。先程、ラオスの人たちが森に入ってキノコなどをとっている写真を見ましたが、当然、自然は変わっていきます。変わることは悪いことではない。日本の場合は人口が多いですから、昔から人々は森に入っていた。作り変えられた森というのが多いのです。

<人工林>

僕が子どもの頃には、関東平野には平地林と言う雑木林が各地に点々とあった。あれは人口林です。江戸時代、米は遠くから運んで来ることができても、葉物類は近場で作らざるを得なかった。野菜作りで一番困ったのが肥料です。わらで良質の堆肥を作りましたが、頻繁にはできない。それでどうしたかというと、関

東平野の農村では畑と同じ広さの雑木林を作り、その落ち葉や草を回収してそれを肥料にした。使ったのはクヌギ、コナラ、ケヤキなど、葉っぱをたくさん落とす木。どっちにしても人口林だったのには変わりはありません。

日本海側に行きますと青森から山口まで、ずっと松林です。それも、冬に日本海から吹いてくる風を止めるために人が作った人工林です。。風が強いところは幅が広いし、あまり吹かないところは狭い。海岸林と言うのは太平洋側にもあります。

<人が関わって変わっていく森>

それから、人工的に植えたわけではないけれど、人間たちが活動するものだから、だんだん森が変わっていった、そういう所もあります。青森の白神山地はブナの自生林があって世界遺産になっていますが、僕自身はそのふもとに近いところの森の方が何となく気持ちが落ち着いて好きです。なぜかというと、地元の人がキノコや山菜採りに頻繁に利用していて、多種多様の木が生えている森だからです。食料だけでなく、薬品として、建築材料として、または鋤の柄などの道具材として、森からいろいろなものをもらって使っている。全部合わせると 100 種類ぐらいにもなります。

僕の家では年末にはかなり盛大に餅つきをします。10 臼くらい。地域の人やその他、たくさんの人たちが来て持って帰ります。臼にも杵にも本当はそれに適した木がある。杵はヒメシャラの木が一番なのですが、その太さのものがいないので、仕方なくケヤキで作った杵を使っています。上野村でも調べてみると、道具材から何からすべて入れると、やっぱり 100 種類くらいもの木や植物などを森からもらってきて利用しています。

<森は単一概念か>

森には、人工林、天然林、原生林、人間が関わって変わっていった森など、いろいろなものがあります。しかも厄介なことに、木を植えればいいのかという風に思って失敗した例もたくさんある。例えば中国の内モンゴル地区での話。もともとは遊牧民が暮らしていた所に森を作ろうということで、日本からもたくさんのボランティアが行って苗木を植えた。幅の広い植樹帯を作ろうということです。中国政府にも、遊牧民を定住させ、そこに漢民族を送り込もうという思惑があった。しかし、あそこは草原じゃなきゃいけない場所だったのです。雨が少ない所に木を植えると木が地下水を汲み上げ、ますます砂漠化が進みます。内モンゴルの人に聞いてみると、昔は 50 センチも掘ると水が出たが、今では 10m 以上掘らないと出ないと言っていました。結局、木を植えに行った結果、辺りが乾燥して、草原が昔のような力を持たなくなってしまった。そして中国政府の定住政策に手を貸すことにもなってしまった。ただ木を植えればいいのかというものではない。場所によって条件が全部違います。

<修験道について>

先程、司会者の上手なほら貝を聴きました。修験道というのは、山を歩いて何かをつかみ取る、そういう信仰です。僕は修行はしませんが修験道に関心は持っています。昔は人々がいろいろな意味で自然とともに生きていました。そういう素養のある人たちが何か足りないと感じた時、山を歩いて修行をしたんです。だから言葉なしでちゃんと完結した。ところが今は人々が自然とともに生きていない。うっかりすると山に挑戦に来てしまう。自分を試すために山に入るみたいな人が出てくる。それはただの登山で修験道ではありません。ですから、この頃は修験道の考え方を最初に多少説明せざるを得なくなっています。

5 年前位に内モンゴルの人から頼まれまして、日本からも雨ごいの助っ人に行きました。一応、修験者も

雨ごいをします。地元のシャーマンと一緒にやりましたら、その日から 3 日 3 晩雨が続き、村の人たちは大喜びでした。ただそこに雨を降らせるためには、上にある大気中の水分を集めちゃうわけですから（気の力で集めます）周りが乾燥してしまう。あまりむやみにやるものではありません。

<古代建築と木>

僕は、京都や奈良にある木で作った文化財のことにも関わっています。例えば、法隆寺は 1300 年経っていますがまだ現役です。50 年に 1 回ちょっとした改修をし、250~300 年には全部分解して壁も含めバラバラに壊してしまう。そして柱も板もすべて総点検します。傷んでいる木があれば、次の 300 年位もたなければならないのですから、同じ樹種で同じ位の品質のものを注文します。法隆寺の金堂の大黒柱がそろそろ中間地点だと宮大工さんが言っていますが、そんないい木が今の日本にあるのかということです。

奈良の薬師寺の再建をやりましたが、あの伽藍の木は 100%台湾ヒノキです。文化財というのは実は再建ではなく新築です。元の図面など残っていませんから、たぶんこんなではなかったか、ということでやります。薬師寺のために切りまくったので、台湾ヒノキは今はもう伐採禁止になっています。大型の木造建築を扱う会社が次に目を付けたのは、ラオスヒノキで、それもバンバン切って日本に持ってきて、今倉庫に眠っています。ラオスのいいヒノキは切り尽くした形になって、今度はアフリカのカメルーンに似た木があるようです。

私たちの木の文化は、確かにいいんですが、その陰には賞賛できないことがたくさんある。森とか木の問題はいつもそういう矛盾を含んでいます。

<自然の違いが人間の基本的な考え方をつくる>

分野的には私の大先輩に当たるかもしれませんが、和辻哲郎さんがこんなことを主張しています。「世界は草原、砂漠、モンスーンの 3 つの地帯に分けられる。その自然の違いが、人間たちの基本的な考え方に変化を与えた」と。確かにそうです。

砂漠地帯の自然は非常に厳しく残酷でもある。そこでは人間中心、もっと言えば部族が絶対、という考え方にならざるを得ない。それに対して、彼はヨーロッパ的世界を草原地帯とし、弱い自然が存在すると言っています。ヨーロッパには森もたくさんありますが、確かに日本に比べると弱いですね。日本の感覚で、樹齢 50 年くらいかなと思う木をむこうで見つけたら「100 年くらいですか」と聞いてみると大体当たっています。自然の力、成長力が弱い。同じ島国でも、イギリスと日本を比較すると、もともとあった木の種類はイギリスが日本の 10 分の 1 くらいです。そういう場所の人たちには、人間がこの世界の管理者で、人間がしっかり自然を守って保護しなければならない、そういう考え方がどうしても出てくる。ヨーロッパも大変失敗をしてきています。産業革命の時には炭を作りまくり、そこら中に洪水が起きている。”しまった”ということで林を残す方向に切り替えるのですが、今度は北アフリカの木を伐りまくって炭にしてしまう。そんなことをしながらも、結局草原地帯の人たちは、自然と人間は、秩序立った関係にあるのが一番いいんだ、という考え方を生んでいきます。

それに対して、東アジアのモンスーン地帯では何しろ自然の力が強い。日本は台風は来るし豪雨も昔から日常的にある。人間は自然にはかなわない、そういう気持ちを持ちながら生きています。

そういう風に自然の状態が違ってくると人間の基本的な考え方也会変わってくる。そしてまた自然への人間のかかわり方の違いから森も多様になる。世界中に同じ森があるわけではありません。先程のラオスの、ゴムプランテーションの景色、あれが森であるか森でないかは、判定の仕様がありません。その社会の考え方次第です。フランスの田舎に行くと、ここには森があるという場所、そこには果樹園があります。日本では

果樹園はリンゴ畑ですよ。でも彼らの発想では、管理している自然ということで、森なのです。

<秩序の思想ではなく、その地域の思想へ>

世界は、秩序を管理されるのが一番いいんだという考え方。ではその秩序を管理するのは誰か。それは元々ヨーロッパで言えば神様なんですね。実際には「神様がこうしなさいと言っているんですよ」と伝えているのは、神父さんだったり、それを指示された王様だったりする。権力の力によって神の名を借りて支配するわけです。そういう管理の仕方がひとつの理想として出てくる。そしてこの世界は単一の秩序によって管理されるという発想が、帝国主義の時代を生んでいきます。

今のロシアもそうですね。ロシアが考えている世界は、このような秩序であるべきだ、それに従って戦争を開始することになる。実際には、今の状況では無条件でウクライナを支援するしかない。ですが、だからと言って、西側も西側が考える秩序を構築しようとしている。それはアメリカが中心だったり、それにヨーロッパがくっついていたり、あるいはその下に日本がぶら下がっていたりする。

自然というものが、様々に展開するにも関わらず、自然をこのように管理するのが正しいんだ、人間はこのような自然と付き合えばいいんだ、というようなことを一つの秩序の理論として作り上げてしまって、それを権力の力によって実現しようとする。その発想が帝国主義を生み出し、今もそんな考え方の時代を作っている。僕らは、いかに自然のためとか何とか言っても、秩序の思想を作ってしまうと絶対いけないんです。秩序の思想ではなくその地域の思想でなければいけない。上野村には上野村の、ラオスの伝統的な村にはその村の思想があってもいいのです。

<宗教と信仰>

上野村で祀られている神は何かと言うと、それは山の神です。山の神が日本にいつ生まれたのかはよく分かりません。文献に出てくるのは 600 年位前。村に行くと山に今でもたくさんの神が祀ってあって、みんな大事にしている。けれども山の神教という宗教はなく、組織がないから入会も脱退もない。水が湧き出る所には水神様が祀ってある。僕の庭のそばにもありますが、それは不動明王か弁財天でして、どちらも神様ではなく仏教の仏様です。つまり日本社会にはそういうものが宗教ではなく信仰の形としてあるんですね。宗教や信仰という言葉は明治にできた翻訳語です。日本には仏教は古代からあるし神様もいっぱいいる。自分の生きている世界のどこかに仏がいて我々を守っていてくれる。あるいは神がいて守ってくれている。それを普通に感じている。子どもが、お父さんやお母さんが守ってくれていると感じているのと同じようなものです。例えば家族が亡くなると、仏壇を用意して写真を飾ったり果物を置いたりして前で手を合わせる。それは特別な信仰というわけでもない。そういう風にして亡くなった人とも一緒に暮らしていく。その方が気持ちが落ち着く。宗教でも信仰でもないものを我々はいまだに残している。森や木もそういうものと共にあった。日本社会における一種の自然信仰と言うのは、自然の中に真理のありかを見つけていく、そういうものです。

<関係思想で捉えられる森>

日本の発想というのは、先に実態があるのではなく、関係が実態を作っていく➡先に僕がいるのではなく、僕の関わるいろんな関係（気づいているもの、気づいていないものを含め）が蓄積されて僕を作っていく、先にあるのは関係。親子、夫婦というのも同じで、すべて物事は関係が作り出していくという風に考えてきました。森についても、自然の関係がいっぱいあって、その積み上がった自然の関係から木が生まれ森が生まれ、またそこに暮らす動物が生まれてきたりする。そうすると、最も純粋な関係から生まれてくるものに

自然を感じている。それに対して、実は人間は純粋な関係だけで生きていない。何故か。人間は自我を持っている。自分の意見を通そうとして最後には戦争まで始める。これがあるから純粋な関係で生きることができない。欧米の思想と根本的に違うのはここです。欧米は、人間は自我があり欲望を持ったりするから文明も歴史も発展していくと考える。対して、日本やアジア系の人の発想は、自我なんてものがあるから目的を遂げようとしていろいろな問題を起こしていく。できれば自我なんてない方がいい。仏教でいうと自我の消滅、悟りですね。実際にはそれは非常に難しいですが、そこに理想を求めるということです。

<自然と人間の関係の着地点はその地域を見つけ出していくしかない>

森と人間の関係に、世界を覆うような理想の関係があるという風に考えてはいけないんです。その地域に適した関係がある。しかもいい悪いは別にして地域も変わっていく。ラオスの村でいうと、ああいう風に破壊されていかないうちという気持ちを我々は持ちますが、それでも、車を使ったりパソコンでつないだりと、暮らしは変化していきます。社会は変化していくけれども、どこに着地したら自然と人間の関係が少なくともどちらかがどちらかを破壊するような関係にならないか、それをまたその時間のものとして、その地域の人が見つけ出していかなければならない。

今、日本海の松林に行くと、中に雑木林的にいろんな木が出始めています。江戸時代にすごく苦勞して植えた松林ですが、100年200年の内に落ちた松葉で土が肥え、違う木が生育できるようになってきた。松は肥えた土が嫌いですから枯れてしまう。松林を自然遺産として残すのか、それとも自然の推移に任せるのか。正解はありません。

うちの村は大きなプロペラを回して風力発電をする気はありません。村の人たちに言わせると、空は人間だけのものじゃない。鳥たちが飛ぶ場所だし、トンボも飛ぶ。95%が山の村ですから、木を使い切りながら回していく、そういう仕組みを作っていく。うちの村の条件、たどってきた歴史から考えると、そういう方法が着地点としてよさそうだと、ということなのです。

質問に答えて

Q 「日本の場合、農業は家族農業がベストだ」とのことですが、その辺をお聞きしたい

農業だけではないんですが、一番大事なのは持続性。どういうものが持続するのかというと、実は家族農業以外に持続したものはない。ソ連の時代には国営の集団農場でしたが結局失敗した。中国も共同農場ですが、あれも失敗でした。アメリカも多数派は家族農業。一部が大型の企業農業という感じですが土地が荒廃してきていて将来的には持続性がないんじゃないか。家族経営くらいのもものが事実として一番いい。日本も企業農業が出てきていますが、持続する企業農業の形があるとすればどういうものなのか真剣に考えなければ

いけない。もうかる時だけつまみ食いをして、もうからなくなったらポイっとやめる。そういうことになり

かねない。林業などの山の関係もそうですが、持続ということを念頭におかないと結局社会を壊してしまう。

Q 地域が、それぞれ一番いい自然との付き合い方の着地点を見つけていく、というお話でしたが、なかなか難しいのでは

上野村も何も問題がないというわけではない。まあまあな着地点を見つけている一番の理由は、村の人が村から出て行こうとしても周りが全部山で、いい道もなく出ていけなかった。村の中でやっていく仕組みを作らざるを得なかった。村には宅地というものが造成されたことがない。また村の人が村外に働きに出ることが元々ない。実際には昼間の人口の方が多いんです。つまり周辺から村に働きに来る。森林を使っているいろんなことをしていますし（今一番の特産物はキノコ）素朴な村がいいと観光客も年間 20 万人くらい来ます。

日本の田舎に行って、この村は持続する可能性があるかどうかを見分けるポイントは、祭りや行事が残っているか、規模が小さくてもいいんです、自分たちの暮らしを大事にしているかですね。ただ、うちの村でもだんだん人口が減り高齢化してくると、それができなくなってくる。それでどうするかというと、都会から助っ人を募集しています。そういうのを覚えたいという若者が結構いて、祭りの時だけでなく年間を通してやってくる。村の人口は約 1100 人ですが（その内 4 分の 1 が移住者）、そういう、村に住んでいなくても村の基本的なことを大事にして通ってくる人たちも村人としていいんじゃないか、と思っています。

雇用場所がないからこの村は崩壊したなどよく言われますが、それは違う。たくさんあって選択できるから雇用場所と言えるのであって、村にたくさんの雇用場所を作るのは無理です。パイロットになりたい人は都会に出ていくしかない。人口移動があってもいいのです。やりたい仕事で外に出ていく人がいる、けど村を大切にする、それが大事です。今は大分雲行きが変わってきていて、市場経済だけでは面白くないんじゃないか、そう思っている人たちが増えています。ただ、地域はそこに家があるだけというサラリーマンも増えていてそういう地域はピンチですね。

Q 「地域」と言う時の枠組みをどうとらえたらいいのか

今どこでも動物の被害が言われています。上野村には猟師が 100 人くらいいますが、実は半分は都会の人。村の中には猟師集団が 10 組くらいあって土日にはそこに都会の人が加わる。田舎の人たちのために動物を少し駆除しなければ、という気持ちで猟に来てくれる。そういう人たちがいるから猟師集団が維持できているわけです。そういう人たちを含めて、その地域は創造される。地域を昔のように固定的に考える必要はない。関係が地域を作ります。

Q 都会にいる人たちはどう森と付き合ったらいいのか

誰でも突き当たる問題。江戸の町は、山手線の内側の半分位の感じなのですが、歩いて生活するには十分の広さだった。お寺に行けば木もあったでしょうが、長屋に住む庶民は自然などない暮らし。しかし自然とともに生きていた。どうしてかと言うと、自然から流れてくる（今の言葉で言うと）“気”を感じる力を持っていた。富士山や丹沢、箱根、北の方からは日光や筑波、そういう霊山から流れてくる気を肌で感じて生きていた。そしてその山に講というグループを組んで行っていた。目に見えるものや触ったりできるものだけを自然だと感じるようになったのは、明治以降の人間です。

浅草の浅草寺は、昔は雨ごいをやっていた。秩父の源流の水を貰ってきて儀式をする。すみだ川をさかのぼった秩父からの川の流れが気の流れでもあり、そういうものと共に浅草がある、ということをビシッとつかんでいた。

明治以降のいろいろな不正をこれから問い直していかなければいけない。市場経済がすべてというものそのひとつ。市場経済では手に入らない大事なものがたくさんあるよね、ということです。